

[報告] 第 30 回歴史地震研究会参加記

東京大学大学院情報学環 総合防災情報研究センター* 原田 智也

Impression Report of 30th General Meeting

Tomoya HARADA

Center for Integrated Disaster Information Research, Interfaculty Initiative in Information Studies, The University of Tokyo
7-3-1 Hongo, Bunkyo-ku, Tokyo 113-0033, Japan

§ 1. はじめに

平成 25 年 9 月 14 日(土)から 16 日(月)にかけて、第 30 回歴史地震研究会が秋田市と秋田県北部周辺において開催された。昭和 59 年に東京大学地震研究所において始まった歴史地震研究会の研究会は、本会をもって 30 回を迎えるのだが、今年には日本海中部地震の発生から 30 年の年でもあるので、開催地が秋田市となった。

9 月 14 日は研究発表会と総会が、15 日は研究発表会と公開講演会『歴史地震から秋田県の防災を考える: 東日本大震災を含めて』が、秋田大学教育文化学部において行われた。16 日は現地見学会「岩館地震、日本海中部地震の跡を訪ねて」が、台風 18 号の接近による悪天候のため予定の一部が変更されたものの、能代市・八峰町を中心に行われた。

筆者は、3 日目の現地見学会に参加することはできなかったが、1 日目と 2 日目の研究発表会、総会、公開講演会に参加させていただいた。したがって、本稿は 1 日目と 2 日目に限るが、第 30 回歴史地震研究会の様子を簡単に報告する。

§ 2. 研究会 1 日目 研究発表会・総会

研究会 1 日目の 9 月 14 日は、研究発表会と総会が行われた。研究発表会の午前には、「台湾の地震」、「九州、近畿の地震、津波、噴火」、「南海トラフの地震(前半)」の 3 つのセッションで 9 件の口頭発表が行われた(1 件は発表取りやめ)。昼休みを挟んで、午後はポスターセッションから始まり、その後、「南海トラフの地震(後半)」、「中部地方の地震」、「関東の地震」のセッションで 13 件の口頭発表が行われた(1 件は発表取りやめ)。

いずれの発表も非常に興味深い内容であり、発表後の質疑で交わされる議論とともに聴くことにより、自身の知識を広げることができて、たいへん勉強になった。特に、筆者の研究と関係が深い「南海トラフの地震」のセッションにおける発表からは、今後の研究の



写真 1. 研究発表会の様子

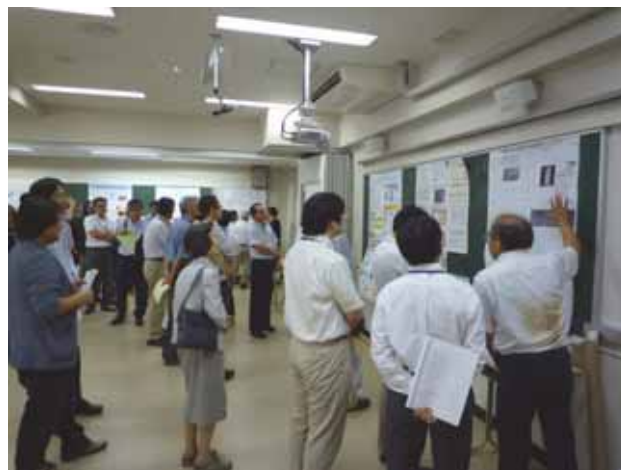


写真 2. ポスターセッションの様子

参考になる知見を多く得ることができた。

ポスターセッションにおいても、それぞれのポスターの前で非常に活発な議論が繰り広げられた。筆者も議論に加わることにより、たいへん有意義な時間を過ごすことができた。

研究発表会後の総会では、2012-13 年度の活動報告と決算報告、2013-14 年度の会長選出と会長によ

* 〒113-0033 東京都文京区本郷 7-3-1
電子メール: haratomo@eri.u-tokyo.ac.jp

る理事の指名などの議事が行われた。議事に引き続き、本研究会で第1回となる功績賞の授与式が行われ、歴史地震研究と歴史地震研究会に多大な功績を残された宇佐美龍夫東京大学名誉教授へ武村雅之会長から賞状が授与された。

ちょうど本研究会では、宇佐美先生が筆頭著者の『日本被害地震総覧 599-2012』(東京大学出版会)が予約販売されていた。筆者も1冊購入し、研究で活用させていただいている。



写真3. 功績賞授与の様子

§3. 研究会2日目 研究発表会・公開講演会

研究会2日目である9月15日の午前は、前日に引き続いて研究発表会が「日本海の地震と津波」、「東北の地震、津波、噴火」、「土砂災害及び地震全般」のセッションに分かれて行われ、13件の口頭発表があった(2件は発表取りやめ)。発表後の質疑では、前日の疲れを感じさせない活発な議論が行われ、前日に引き続いてたいへん勉強になった。

午後は、公開講演会『歴史地震から秋田県の防災を考える:東日本大震災を含めて』が、秋田大学教育文化学部の60周年記念ホールにて開催された。

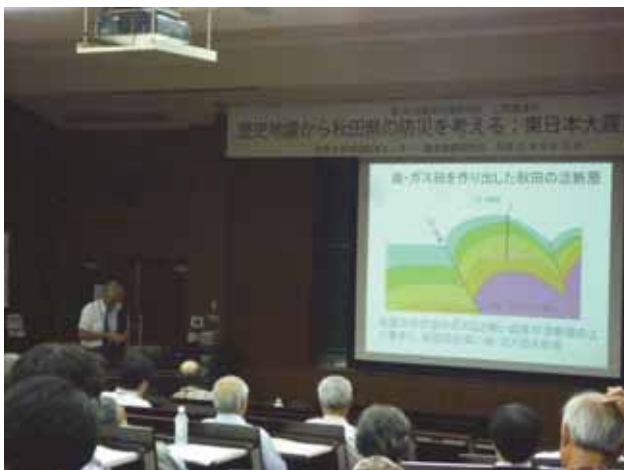


写真4. 公開講演会の様子

講演会は秋田大学地域創生センターの鎌滝孝信准教授の挨拶に始まり、宍倉正展氏による「古地震研究と東日本大震災」、小松原琢氏による「秋田県周辺の活断層と歴史地震」、水田敏彦氏による「秋田県で発生した明治以降の歴史地震とその教訓」、伊藤和明氏による「日本海中部地震を振り返って」というタイトルの4講演が行われた。

それぞれの講演では、たいへん興味深い内容が非常に分かりやすい言葉で話され、一般参加者を含む聴衆は熱心に聴き入っていた。講演後の質疑応答では、多くの質問と意見が出され、聴衆の関心の高さがわかった。

§4. おわりに

筆者は、本研究会で4度目の参加になる(恥ずかしながら、研究発表は第28回の研究会におけるポスター発表1回のみであるが...)。なお、筆者は石橋克彦神戸大学名誉教授の研究室の卒業生であるのだが、学生の頃は歴史地震の研究への関心はほとんどなく、歴史地震研究会の研究会に参加することもなかった(その存在すら知らなかった)。研究室の書棚には、会誌『歴史地震』が並べられていたが、手に取ることもほとんどなかったと記憶している。

しかし、筆者が南海トラフ沿いの巨大地震に関する研究を始め、歴史地震研究による知見が必要となったときに、ちょうどお世話になっている地震研究所で第27回の研究会が開催され、初めて参加させていただいた。そして、これを機に、その後も毎年参加させていただいている。まだ参加回数が少ないので、最近になってようやく研究会の雰囲気慣れてきたところである。

理学系の研究者である筆者にとって、研究会に参加することは、史料に対して歴史学による厳密な検討を踏まえた発表、被災後の人々の行動や復興に関する発表、石碑などの災害の伝承に関する発表など、春の連合大会や秋の地震学会などではあまり聴くことができない研究発表を聴くことができる貴重な機会であり、たいへん勉強になってきた。特に、時代背景や作成経緯などを踏まえた歴史学的な史料の検討については考えさせられることが多い。

これまでに著者が参加した4回の研究会では、前述したように研究発表は1回行ったのみであり、耳学問が中心であった。したがって、5回目以降は研究発表をすることを目標にしようと思う。まずは、来年の研究会での発表を目指して、研究を進めていかななくてはならない。

最後になりますが、行事委員長の林信太郎秋田大学教育学部教授をはじめとする第30回歴史地震研究会の準備と運営に携わられた多くの方々に、記して感謝申し上げます。